

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2021年 11月 12日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田中 千聖

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、宮崎県串間市、幸島観察所
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習(幸島実習)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2021年 10月 31日 ~ 2021年 11月 7日 (8日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、鈴木 崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>本実習では、幸島に生息する野生のニホンザルを対象に、自ら調査テーマを決めてデータを収集し、その結果を分析し、発表を行った。本実習を通して、野生動物を対象とした調査の適切なデータ収集法の模索、および野外調査の基礎を学ぶことができた。</p> <p>■ 実習スケジュール</p> <p>10/31 観察所に到着、オリエンテーション 11/1 都井岬でウマの観察、観察所付近でカメラトラップの設置 11/2 幸島に移動、サルの観察 11/3 サルの観察、岩場の探索、林内を散策 11/4 サルの観察、午後には観察所に戻りデータ分析 11/5 発表 11/6 清掃、観察所付近を散策(京大ウィークスに参加するため観察所に残る) 11/7 京大ウィークスの補助(都井岬)</p> <p>■ 実習内容</p> <p>本実習を行うまでに、野外実習は何度か行ったが、キャンプ生活を送るのは幸島実習が初めてだった。当初の予定では2日目に幸島に渡ることになっていたが、2日目は波が荒く船を出すことができなかったため、都井岬で半野生のウマを観察した。ウマたちは人が近づいてもあまり恐れることはなく、悠々と草を食べていた。想像していたよりも体格が良く、餌資源には困っていないように見えた。一方で足は短いので、全体的にがっしりした印象を受け、軍馬の特徴がはっきり表れていたように思う。仔馬も1頭確認できたが、警戒心が薄く、観察している学生たちに近づいてじゃれることもあった。</p> <p>午後には、観察所近くの林内に3つ程カメラトラップを仕掛けた。地面を掘り返した跡や、ドングリの食べかすを頼りに、設置する場所を探した。帰学した後に動画を確認すると、イノシシやアナグマが探索している様子がしっかり映っており、カメラを設置する場所の目安の見つけ方を学ぶことができた。</p> <p>幸島観察所に行く前から、直近の幸島近海は波が荒く、中々幸島に渡ることができていないと聞いていたため、実習中に幸島に行くことができるか不安があったが、いざ幸島に行った後は天候にも恵まれ、楽しく実習が行えた。幸島に着くと、多くのサルが海岸の岩場まで降りてきて、鈴木さんの持つ餌袋を目当てにしきりに鳴いていた。サルに触れることができるほど近づいたことは今までなかったため、サルに見つめられながら岩場を進むのは少し怖かった。サルの観察は、主に海岸の砂場で行った。ムギを砂浜に撒き、そのエサを目当てに集まったサルたちが採食している様子を観察した。サルの採食行動を観察しているうちに、ムギを口で直接食べる個体と手で取って食べる個体がいることに気づき、採食方法の違いに興味を持った。そこで、サルの年齢や性別によるサルの採食方法の違いや、採食位置の変化を本実習のテーマに決めて、行動観察を行った。観察方法は、サルがムギを、手を使って食べているか口を使って食べているかを等間隔で複数個体確認し、また、1分間でどれだけムギを口に運んだかをカウントして、採食方法や性別等による、採食スピードの違いも観察した。結果としては、上位のオス個体はほぼ口を使って採</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

食しているのに対し、若いメス個体や子持ちのメス個体は、手を頻繁にを使ってムギを食べていたことが確認できた。口を使って採食すると、手を使う場合よりも採食スピードが速いが、砂を多く口に入れてしまうことや、踏み固められたムギを食べる際は口では掘り出せないという欠点もある。上位オスは、条件のいい餌場（ムギの密度が高い、踏み固められていない等）を得られるために、口で採食する頻度が高くなったのかもしれないと考えた。また、観察中に、潮だまりでムギを洗って食べる個体も観察できた。鈴木さんによると、ムギ洗いをする個体は限られていて、上位の個体の方が他のサルに邪魔されないため、洗う様子がよく見られるそうだが、今回観察した個体はそれほど上位の個体ではなかったため、他個体が近づくとすぐに潮だまりから逃げていた。この他にも、サルの上下関係が伺える行動がいくつか見られ、個体識別表と照らし合わせて個体を確認し、相互の関係を確認することもおもしろかった。

3日目の午後は、GPSや地図を用いて幸島の森を散策した。地図の等高線を見て、自分たちでルートを決めて散策した。林内は険しい箇所もあったが、概ね道ができており、スムーズに散策することができた。散策中、ムギ撒きの時に来ている主群とは異なった、マキ群に会えることを期待していたが、残念ながら会うことはできなかった。4日目は午前中にサルの観察をした後、岩場で貝を採取したり、再び林内を軽く散策したりした。今回の散策では主群に出会うことができ、木を飛び移ったり、子たちがじゃれあったりする場面も見られた。

発表では、普段の研究でサルを対象にしている学生の詳しい実験結果や、1個体をずっと追った観察結果など、色々なテーマの観察・実験結果を聞くことができとても勉強になった。また、私自身のテーマについて、得られた結果を十分に分析することができなかったが、そんな限られた時間の中でも、井上さんや同期の学生のアドバイスを得て、少しでも結果をまとめることができた。また、実習では、普段WRCにいない学生ともたくさん喋る機会があり、親睦を深めることができた。特に料理の面では、毎日の献立を考えてくれる学生がいたり、担当を決めてスムーズに調理を行ったりと、調査活動以外でも自然とお互いに協力し合う関係を築くことができた。今回の実習で学んだ野外での生活方法や調査方法等は、今後の研究活動に活かしていきたい。



都井岬の半野生ウマ



幸島観察所近くの砂浜



ムギ洗いをするサル



グルーミング中のサル

6. その他 (特記事項など)

本実習に参加するにあたって、全日程で実習の補助をしてくださりました鈴木崇文氏には、大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。